

国家戦略特区ワーキンググループ ヒアリング（議事要旨）

（開催要領）

- 1 日時 平成27年2月27日（金）11:16～11:33
- 2 場所 永田町合同庁舎7階特別会議室
- 3 出席

<WG委員>

- 委員 阿曾沼 元博 医療法人社団 混志会 瀬田クリニックグループ代表
委員 本間 正義 東京大学大学院農学生命科学研究科教授
委員 八代 尚宏 国際基督教大学教養学部客員教授
昭和女子大学グローバルビジネス学部特命教授

<提案者>

- 吉村 大 高知県産業振興推進部副部長
鍵山 匡彦 高知県産業振興推進部計画推進課長補佐
大崎 和幸 高知県大川村参事

<事務局>

- 富屋 誠一郎 内閣府地方創生推進室長代理
藤原 豊 内閣府地方創生推進室次長
松藤 保孝 内閣府地方創生推進室参事官

（議事次第）

- 1 開会
- 2 議事 人口400人の村の「まち・ひと・しごと」創生に向けた取組
- 3 閉会

○藤原次長 それでは、高知県の方々においでいただいております。先月末の諮問会議での議論に加えまして追加の提案を頂戴しておりますので、大川村の方にもおいでいただいているようでございますけれども、御説明のほうをお願いしたいと思います。

阿曾沼委員に座長代理をお願いいたします。

○阿曾沼委員 今日はお忙しいところをありがとうございます。

それでは、早速、御説明のほうをよろしくお願い致します。

○吉村副部長 高知県でございます。

今日は提案の機会をいただきまして、まことにありがとうございます。私、高知県庁産業振興推進部の吉村と申します。

右におりますのが高知県庁の鍵山でございます。

○鍵山課長補佐 鍵山と申します。よろしくお願いいたします。

○吉村副部長 こちらにおりますのが大川村の大崎でございます。

○大崎参事 どうぞよろしくお願いいたします。

○吉村副部長 高知県はもう御案内のとおり、全国に先駆けて平成2年から人口減少、自然減の状態に陥っておりまして、人口減少による経済の縮みということが若者の県外流出と、特に中山間地域の衰退を招いてさらに経済が縮むというマイナスの連鎖をたどっております。

このたびのいわゆる地方創生につきましては、地域の活性化を進めるという観点だけではなくて、人口の減少とその背景にある少子化の問題、地方の衰退、この3つの問題を一体に捉えていただいた上で地方の総合戦略の支援をしていただけるということでございますので、大変心強く思っております。

本日御提案させていただきましますのは、先ほど御紹介いただきました大川村という市町村の創生に向けた取り組みでございます。

平成22年の国調人口が411人ということでございまして、離島を除きますと全国で最少の市町村でございます。大川村では無人の飛行ですとか無人走行といった導入事例があるわけではございません。まだまだ正直なところ、勉強していかなければならないという段階にあるわけでございますけれども、飛行ルールをつくるという課題もあると伺っておりますので、ぜひ私ども高知県大川村を実証フィールドにお使いいただいて、お役に立てないかなということを主目的に本日提案に参った次第でございます。

1ページ目をあけていただきまして、簡単に村の概要をまとめてございます。四国の中央部、高知県の最北端の位置をしております、愛媛県に接しておる村でございます。面積も非常に小さくて、約9割が山林、平地がほとんど少ないという地形でございます。人口が先ほど申し上げましたように411人、高齢化率も40%台と非常に人口減少、高齢化率というのが顕著な村でございます。

職員数、予算規模というのもごらんとおり、非常に小さな規模の村ではございますけれども、2ページ目をあけていただきまして、かつては銅山の町として栄えました。四国の水がめ、早明浦ダムの完成によりまして村役場を含めます村全体が水没をいたしまして、よくダムの渇水時になりますと、旧の役場庁舎がダムの湖底から姿をあらわすということで、全国放送でも何度か放送していただいて、そういう点ではお聞きいただいているのではないかとっております。

そういった人口の減少の加速と高齢化が顕著な大川村でございますけれども、このたびの地方創生の動きを絶好の追い風として捉えまして、4ページでございます。大川村の創生に向けた取り組みということで、スローガンとして大川村プロジェクト、ボックスの3行目に茶色で、村民一丸で何が何でも400人の人口を守る、400人口を維持するということを大きなミッションとして掲げておりまして、下にございます主要産業の畜産業、観光

交流の拡大、生活交通、産業交通の確保という3つの取り組みを総称しまして大川プロジェクトと名前をつけておりますけれども、創生に向けて取り組んでいきたいということを思っております。

特に、5ページ目でございます小さな拠点づくりという資料がございますけれども、まち・ひと・しごと創生総合戦略、こちらの主要施策にも位置づけをいただきました。本県の集落活動センターの取り組み、集落の衰退に歯どめをかける活動拠点ということで、飲食、宿泊、特産品、福祉のサービスという、そういう活動拠点という役割を担うわけですが、大川村でいいますと、大川村集落活動センターの下の写真にありますように、「村のえき」という、こうしたところを活動拠点にしながら、来年度以降、28年4月からこうした小さな拠点を核にして集落活動センターを動かしていこうと思っております。

この資料の左上の機能1でございますけれども、学校ですとか保育園の児童生徒への地産地消を意図して給食を提供しています。一番左下に生活物資の提供、機能2とございますけれども、現在、運送業者さんですとか宅配業者さん、地元JAとコラボレーションしました買い物やデリバリーの支援というのを検討しているのですが、こちらで中山間での無人飛行による輸送体制の維持、堅持ができればということを考えてございます。

右上にいきますと機能3ということで、特産品でございます土佐はちきん地鶏、こちらは銀座松屋本店で定番商品として取り扱っていただいておりますけれども、もう一つ、大川村の大川黒牛ということで、謝肉祭のバーベキューでよくメディアには紹介されるのですが、はちきん地鶏、大川黒牛の増産ということをやっていききたいと思っております。

機能4としまして、観光交流の拡大。山岳観光、こちらをうまく使いましてハイキング、トレッキングの体験型の山岳観光の体系プログラムをつくって、観光客に楽しんでいただく。また、かつて鉱山で働いておられた鉱山労働者OBの方を大川村ファン化するというような取り組みで、順次、集落活動センターの集約をして、地方創生に向けていききたいということを思っております。

6ページ目でございます。本日の提案は、この創生のチャレンジの一環としまして、日本の飛躍的な技術の発展、こちらにつながる実証フィールドとして採択いただければと。そのことで村民の安全な安心な暮らしを支えることができればということを願っております。

生活環境の実態ということで、左半分は村内の移動手段という資料をまとめてございますけれども、谷合いという地形にありまして、平地がほとんどありません。ですので、移動手段は主に自家用車、数少ない公共交通に支えられております。幹線道路は非常に狭くて曲がりくねった道路の連続で、ダムを渡る橋も限られておりますので、隣の集落から役場のある集落まで30分以上かかるというような状態ですし、車が入れないところに住んでいらっしゃる村民もおりますので、日々の暮らしを送るだけでも大変な苦勞がございます。現状では車に頼らざるを得ないのでございますけれども、不採算路線でございますので、宅配です

とか、公共交通ですとか、そうした移動サービス、手段の縮小ということも懸念しております。

7ページをあけていただきまして日用品の確保の点でございますが、村内の店舗も高齢化ですとか後継者不足が顕著で、存続というのが見通せず、こちらの課題を持っておりますし、必要に応じた商品配送システムというのを考えないといけないということを課題として考えております。ですので、日用品の確保の面で言いますと、例えばダム湖の対岸への輸送ですとか、道路のない場所への輸送、こちらが効率化されて省力化されますと輸送サービスの堅持ということとあわせてスピードアップも図られますので、利便性が大きく上がるだろうということを思っておりますし、さらに、高知県は災害が多うございますので、台風ですとか豪雨時の災害時応急対策に大きな効果が見込めると感じております。

大川村におきましても、過去に村の奥深くにあります2,000人がかつて暮らしていた鉱山跡地に現在林間学校がありますけれども、ここに通じる道路が豪雨で遮断をされまして、宿泊をしておりました児童生徒が身動きできなかつたということがございました。このときはしばらくして防災ヘリを飛ばして救助に向かったのですがけれども、このたびの新しい技術がありますと、救助に向かうまでの被災状況の把握、安否の確認、通信の確立、食料品の輸送といった応急対策に大きな効果が見込めると思っております。

大川村の実証フィールドの特性としまして、地形面ではダム湖、河川沿いに長い距離の飛行ルートが確保できるということがございます。また、山林についても人通りがほとんどございませんので、村を挙げて安全な実証フィールドを御提供できるというのがある意味強みと思っております。

日本一小さな村のチャレンジではございますが、うまくいけば高知県内の各市町村に波及効果も見込めると思っておりますので、高知県庁も大いに力を入れて全面的に支援をする体制を踏んでおります。日本の技術革新への貢献をもって大川村の創生の一助になればと思っておりますので、簡単ではございますが、提案とさせていただきます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

○阿曾沼委員 ありがとうございます。

これは確認ですが、近未来技術としてドローンを使うという御提案ですね。自動走行の車ですとか、ドローンの利用目的等具体的なことや、どの規制をどう変える必要があるなどの御提案の具体的なご提案はございますか。

○吉村副部長 先ほど申し上げたことの繰り返しになりますが、規制緩和をお願いするというよりは、ぜひ実証フィールドとしてお役に立てないかなという提案でございます。

○阿曾沼委員 実証フィールドは何の実証フィールドになりますか。

○吉村副部長 無人走行であったり、無人飛行であったりということを考えております。

○阿曾沼委員 なるほど。例えば7ページでお示し頂いた日用品の確保ということは、物品も運ぶということですね。

○吉村副部長 はい。デリバリーで使えないか。先ほど申し上げましたけれども、災害時

の安否確認ですとか、被災状況の確認といったこと。

○阿曾沼委員 安否確認と被災情報と、日用物品を運ぶということでは、利用する機器なども変わってまいりますね。

○吉村副部長 はい。

○阿曾沼委員 物販も含めてやると、物流も含めてやるということですか。

○吉村副部長 物流を含めての御提案でございます。

○阿曾沼委員 先生方、何かご質問がございますか。

○八代委員 狭い山奥の道で曲がりくねっているから自動走行はかなり難しいですね。むしろドローンというか、飛ぶほうに特化したほうがわかりやすいとは思いますが、なぜ飛ぶほうに特化するかというところ、大きな湖があって、ある意味で落ちて安全だということと、橋が少なく不便だということの活用。どうなのですか。あとは山林があるから確かにですね。

○本間委員 大川村の実情はよく御説明いただいたのですけれども、どういう技術をどういう形で取り込んでどういう効果があるかというところがいまいまいちよく見えなかったもので、そのあたりをもう少し詰めていただけると。

○吉村副部長 そちらのほうは御指摘のとおりと反省もしております、まだまだ勉強が始まったという、緒についたばかりでございますので。

○阿曾沼委員 済みません、少し違う視点での質問になってしまうかもしれませんが、400人の人口を守るという目標は、本質的には住人を増やしていかなければなりませんね。そうすると、若い人たちに移住してもらおうとか、産業振興とか観光振興によって、そこで働く人に来てもらって定住してもらおうという政策もやるのでしょうか。例えば支援を特に手厚くする等の方策によって移住を促進するとか、既に取り組みは具体的にやってらっしゃるといことなのですか。

○大崎参事 そうですね。今までも一応取り組みとしてはやっているのですけれども、本格的に始めるのは今年度から、県の支援をいただいて一緒に進んでいこうということで、先ほどおっしゃられたように主に産業振興の面で土佐はちきん地鶏というのを大川村中心にやっております、その増羽体制ということで、新しく鶏舎を立てたりということをやらずこれからやっていこうと。それによって雇用をふやしていこうという形で進めようということを考えております。

○阿曾沼委員 近未来の技術を使うということと、ダイレクトにつながるということではないという理解でいいですか。

○大崎参事 そうですね。その産業振興を進めるという意味ではダイレクトということではないかもしれません。

○本間委員 5ページの拠点づくりの中で、どこに生かせるかということが具体的に指摘していただけたらもっと推進できるかなという気がするのです。

○吉村副部長 主に機能2のところを考えております。

○大崎参事　そうです。左下の機能2のところですね。物を運ぶという部分です。

○阿曾沼委員　そういう意味では、それなりの大きいドローンが必要になりますね。機能2の目的のために、何をどう使って、どうされたいのか等、提案内容について、多少わかりにくいところがあると思います。是非、より具体性を持ったご提案があると検討ができるのではなかと思います。

○吉村副部長　薄くて申しわけございません。道路が狭くて曲がりくねっていますので無人走行というのは難しいかもしれませんが、ストレステストには格好の場かなと勝手に思っております。

○阿曾沼委員　それはそうですね。

ほかにございますか。事務局のほうはよろしいですか。

では、どうも今日はありがとうございました。